伊佐津川の誕生

信長による天下平定がまもなく完成するとみた幽斎は、戦向きの山城ではなく、京都二条城、盟友光秀の坂本城や亀山城（亀岡）、秀吉の長浜城のように、平野に城を築きました。商業や手工業などを重視した城下町を発展させる平和で豊かな時代が来ると読んだと考えられます。

当時、西舞鶴には真倉川と池内川がそれぞれ別に流れており、それらは現在の西舞鶴駅の南側で大きな湿地帯を形成していたと考えられ、大雨が降ると下流一帯が水没したといいます。幽斎はなんと、2つの川を上流部で一本に合流させて「伊佐津川」を誕生させました。実は、伊佐津川は人工的に造られた川だったのです。

こうして西舞鶴の川は現在の姿となりました。高野川と伊佐津川は、田辺城の堀の役割も果たし、北側には海、南側は湿地帯と、西舞鶴を防御力の高い城下町として築き上げました。

幽斎により造られた伊佐津川。しかし、その後も何度も洪水があったことが分かっています。一度大雨が降ると、川は氾濫して一面は海と化し、家屋を押し流し、田辺城まで泥水が広がりました。京極高知の時代には幽斎の意志を受け継ぎ、伊佐津川の改修・補修工事が行われました。

現在の田辺城付近の海抜は1・5㍍。当時は約0・6㍍しかなく高潮との戦いは江戸時代を通して続いたそうで、屋敷地はかさ上げされ続けました。現在でも、城下町時代の各町境には深い石組水路が残っているのを見ることができます。

大手ポンプ場の建設など現在も浸水対策が進められていますが、西市街地は昔から水害との戦いの歴史があったのです。

▲道路や地形は現代のもの

伊佐津川の一本松地蔵

京極高知の伊佐津川の補修工事には一つの悲しい物語が残されています。

高知が補修工事を命じた庄屋（※）山口長左衛門には年頃の美しい娘がいました。娘は毎日昼前になると工事場で働く父親に弁当や菓子を運びました。工事には地元をはじめ、丹後や若狭方面からも多くの人が働きに来ており、美しい娘のことはたちまち彼らの評判になりました。そのため工事がはかどらず、襲ってきた洪水でようやく築きかけた堤防も根こそぎ流されるなど、工事は遅れるばかり。そのうち「あの娘さえいなければ…」と、藩の役人は主命により、ある夜ひそかに娘を誘い出し切り捨てました。その後は皆仕事に精を出すようになり、遅れた工事も取り戻し、新しい川ができました。村人たちは犠牲になった娘を哀れに思い、その霊を慰めるため堤防の脇に、石地蔵を建て「一本松」を植えて懇ろに祭ったといわれています。そしていつの頃からか、この石地蔵を「一本松地蔵」というようになりました。

西舞鶴のまちづくりの過程には、こうした話以外にも興味深い話がいくつも残されています。

▲一本松地蔵

※庄屋…代官のもと村政を担った村の首長

田辺城域の名残

当時の田辺城の城域を今のまち並みに照らし合わせると、今でも水路や道路などに城域であった痕跡を見ることができます。堀や石垣、街路は城を守るために必要不可欠なものでした。

幽斎によって築かれた田辺城は京極家時代に三ノ丸が拡張され、牧野家時代には城の改修などが行われ、1873（明治6）年に廃城になるまでその姿が維持されていました。城域は南がJR西舞鶴駅の北側に残る水路、西側と北側は国道27号線、東側は府道大内交差点の南北700㍍、東西300㍍の縄張りを持っていたとされます。

石垣を見ると、舞鶴公園の城門を入ったところは本丸の天守台、うのもり神社と舞鶴公園のJR線路脇は二ノ丸の石垣です。堀ではJR西舞鶴駅東口を流れるものや、裁判所の前から大手川になるものは三ノ丸の堀跡です。

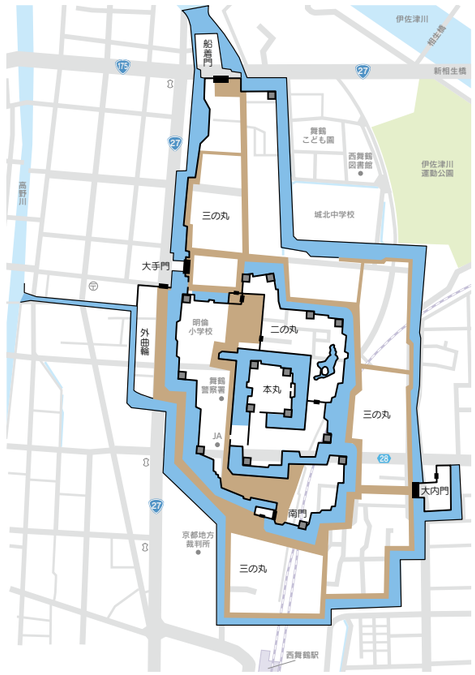
まちの地割や道筋などは幽斎の頃に造られましたが、その地割、道筋、溝などは、今とほとんど変わっていません。

戦略道路としての道

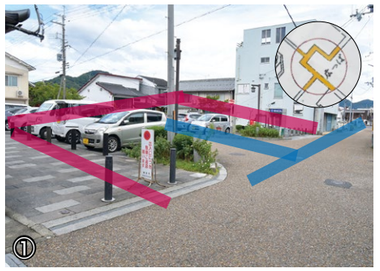
田辺城を中心に城下町が造られるようになると、城下町も城の防御の一環として考えられるようになります。道の造りはコの字型の鉤（かぎ）の手や食い違い、三差路などが基本となり、敵が攻撃を仕掛けてきた時に見通しを悪くし、簡単に進ませない工夫がされました。

西市街地は道が狭い、車で走りにくいなどと言われますが、それは歴史の名残なのです。

▲西市街地のいたるところに残る石垣や堀跡



▲現代の地図に昔の田辺城域を照らし合わせた地図



①寺内にある広っぱ。当時は青線の道はなく、赤線のコの字型の道であった
②道を直交させないでわざとずらして交差させた食い違いの道
③至るところで見られる三差路

▲約300年前、田辺城下を襲った大火の後、今の場所に移転した吉原。軒の連なる家並みや漁民が掘った入江と両岸に舟屋の並ぶ風景など、市内でも独特の景観を持つ

▲高野川に架かる田辺大橋。高野川を自然の外堀とした当時は、城と町をつなぐ唯一の橋であった

▲城下町と外の村を分けた「農人橋」。この橋を渡って田辺城下に野菜が運び込まれた